

ケマルパシャザーデ・ターリヒ第4部 —研究と校訂—

(要旨)

今 澤 浩 二

イブン・ケマル、あるいはケマルパシャザーデと呼ばれる人物、すなわちシェムスッディン・アフメト・ブン・スレイマン・ブン・ケマルパシャ(1468/9～1534)は、軍人の家系に生まれながら、のちウレマーに転身してバヤズィト2世、セリム1世、スレイマン1世の3代に仕え、ウレマーとしては最高位のシェイヒュルイスラームにまで上りつめた知識人である。流麗なオスマン語散文による彼の年代記『オスマン王家の歴史』(*Tevârih-i Âl-i Osman*)は、908(1502/3)年、バヤズィト2世の命令で執筆が始められ、1人のスルタンの事績に1部をあてるという形式を取り、始祖オスマン1世からバヤズィト2世までの各治世を8部にまとめ、916(1510/11)年、バヤズィト2世に献呈された。その後スレイマンの要請で、セリムとスレイマンに関する2部が追加され、こうして全10部から成る、いわゆる『ケマルパシャザーデ・ターリヒ』が誕生することとなった。

しかしながら、この年代記は成立当初ほとんど顧みられることがなく、その後の史書にも利用されずに忘れ去られていった。その原因のひとつには、ほぼ同時期に執筆され、「最も詳細で正確な初のオスマン朝史として名声を博した」イドリース・ビトリスィー(*İdris Bidlisi*; 1520年没)のペルシア語による年代記『八つの天国』(*Hasht Bihişt*)が専らその後の年代記に利用されていったことが挙げられよう。この書の持つ重要性が真に理解され始めたのは、今世紀後半、Ş.トゥラン氏によって第1・2・7部が公刊されてからのことであり、最近では第8～10部についても校訂や研究が進められている。これらの校訂・研究を通じて『ケマルパシャザーデ・ターリヒ』は、その記述が詳細かつ正確という点で、特にオスマン朝政治史を研究する上で欠くことのできない重要な史料であることが広く認められるようになってきた。しかし遺憾ながら、研究が進んでいるのはこれらの部分のみで、残りの第3～6部については、その内容がほとんど明らかになっていない。第3・5・6部の完全な写本はいまだ発見されておらず、第4部は写本のまま取り残されている状況なのである。

こうした現状に鑑み、本論文ではバヤズィト1世の治世(1389～1403)に関する第4部の校訂を行なう。

まず本論文第1部では、『ケマルパシャザーデ・ターリヒ』第4部の写本や史料源、独自の情報などについて検討を加えている。現在、第4部に属する写本はイスタンブルに3種確認されており、中でも、ミッレト図書館に所蔵されている一写本(*Ms. Millet Kütüphanesi, Ali Emîrî Efendi, Tarih 30*)が最も優れており、これを校訂の際に底本として用いた。またイブン・ケマルは、『ネシュリー・ターリヒ』、無名氏のオスマン朝年代記、『オル

チ・ターリヒ』、『ルーヒー・ターリヒ』、タクヴィーム(暦形式の歴史年表)などを利用していることが明らかとなったが、それを指摘するにとどまらず、さらに、その史料のどの系統の写本が利用されているかまでを究明することに努めた。

本書第4部は序に相当する部分とそれに続く50章とから構成されている。その記述内容を見ると、上述の諸史料からは窺われないイブン・ケマル独自の情報も豊富に含まれていることがわかる。たとえば、以下のようなものが挙げられよう(“ ”内は概要)。

- (1) バヤズイトが王子ムスタファにサルハンおよびハミト領を与えたことについて。

“[1390年、アナトリア西部の諸ベイリクを征服した] バヤズイトは、アイドゥン領をエミールの一人に、サルハン領はハミト領と併せて王子ムスタファ・チェレビに与えた。” (fol.121a[校訂テキスト:p.57])

- (2) ワラキア遠征について。

“ワラキア公ミルチュは、以前バヤズイトのエミール、フィールーズ・ベイに襲撃されたことを恨みに思い、反乱の機会をうかがっていた。そこで、バヤズイトがアナトリア北部のカスタモヌ地方に向かったのを好機と見てドナウ河を南に渡り、カルノヴァ(Kärn-ovası)までオスマン朝領に侵入した。これを知ったバヤズイトは、カスタモヌ遠征を中断してルメリに急行したが、ワラキア軍はすでに引き上げていた。冬が近かったので、バヤズイトはエディルネで冬を越し、翌年(1392年)春、進軍を再開した。ワラキアに侵入したバヤズイト軍に対してミルチュは果敢に戦いを挑み、早朝から日暮れまで激闘が続いた。両軍とも多くの死者を出したが、バヤズイトにつき従っていたキリスト教徒君主キョステンディル(Köstendil)もその中の一人であった。” (fol.123b-125a[校訂テキスト: pp.81-95])

- (3) カドゥ・ブルハネッディンがアクコユンルのカラ・ユリュック・オスマンに殺害されたことについて。

“敵に祖国を追われたアクコユンルのカラ・ユリュック・オスマンは、スイヴァスの君主カドゥ・ブルハネッディンのもとに避難してきた。ブルハネッディンの保護を受けたカラ・ユリュック・オスマンはしばらくスイヴァスに滞在していたが、望郷の念にかられ、ある日突然スイヴァスを出発した。ブルハネッディンはカラ・ユリュック・オスマンが自分の許しを得ず無断で去ったことに怒り、そばにいた少数の従者を連れてそのあとを追った。両者の間に戦闘が生じ、カラ・ユリュック・オスマンはブルハネッディンを殺して祖国へ向かった。” (fol.129a-b[校訂テキスト: pp.131-137])

- (4) エヴレノス・ベイとトゥラハン・ベイの征服活動について。

“1394年、テッサリー地方(ギリシア北部)のイエニシェヒルを征服したバヤズイトは、その周辺地域の攻略をウジ・ベイのエヴレノスに命じて帰還した。エヴレノスは数年間その地にとどまって諸城の征服に従事し、息子バラクもフェネル(イエニシェヒルの南西)を陥落させた。エヴレノスに仕えていたトゥラハンは、エヴレノスの命令でトゥルハラ(イエニシェヒルの西)を攻め落とし、従者ととともにその地域に移り住み、領地とした。エヴレノスはヴァルダル・イエニジェスイに居を構え、その地域の繁栄に尽くした。トゥラハンとその息子オメルはトゥルハラとイエニシェヒルを栄えさせ、さまざまな慈善施設を建設した。” (fol.134a-135a[校訂テキスト: pp.169-175])

- (5) サイド・ムハンマド・ブハーリー(エミール・スルタン)の起こした奇跡について。

“ニコポリスの戦いはメッカ巡礼の時期に起こった。その年、バヤズイトの側近の一人がメッカに巡礼した。アラファートに巡礼者たちが集まった時、一人のデルヴィーシュ(ブハーリー)が現われ、「今、ユルドゥルム・ハン(バヤズイト)がハンガリーと戦っている。我々は彼のもとに行き、援助すべきである。」と言ってセマーに入り、風のように去った。すぐもどってきて、アラファートの巡礼者たちにバヤズイトが勝利したことを知らせた。のち、バヤズイトはこれを聞いて驚き、ハンガリーとの戦いで窮地に立った時、こうした神との合一に達した人々が自分を助けてくれたことを悟った。その後、そのデルヴィーシュがブルサに住んでいることを知ったバヤズイトは彼を訪ねて、弟子となり仕えることを望んだ。また、彼に自分の姉妹を与えた。ブハーリーはムラト2世時代に没し、ブルサに埋葬された。”(fol.138a-139a[校訂テキスト: pp.201-207])

- (6)ニコポリスの会戦後、ウジ・ベイたちがハンガリーを襲撃したことについて。

“フィールーズ・ベイは自己の領地であったヴィディンからトランシルヴァニア地方に侵入し、バシヤ・イイト・ベイとエヴレノス・ベイはそれぞれサヴァ河、ドナウ河を渡ってハンガリーに入り、スイレムを包囲・攻略した。さらに進軍し、首都ブダまでを支配下に入れた。”(fol.139a-140a[校訂テキスト: pp.207-215])

- (7)シェイフ・ハーミトがバヤズイトに飲酒をやめさせたことについて。

“[セルビア王ラザールの義子ヴルク・オールが、ラザールの娘をバヤズイトに与えた。]バヤズイトはその娘から飲酒を知り、酒にふけるようになった。ハージー・バイラム・スルタンの師シェイフ・ハーミトがバヤズイトを飲酒の害から救った。”(fol.144a[校訂テキスト: p.243])

- (8)キプチャク・ハン国のエミール、アクタイ(アクタヴ)がオスマン朝に避難してきたことについて。

“ティムールがトクタミシュ・ハンを破り、キプチャク・ハン国を荒廃させると、その国の有力エミールの一人、アクタイがタタールの従者とともにドナウ河を渡ってルメリに入り、バヤズイトに保護を求めた。バヤズイトは敬意を払ってアクタイを受け入れ、フィリベ地方をアクタイの従者たちの夏営地・冬営地にして住まわせた。その後さらにキプチャク方面からルメリにタタールが移住し、アクタイのもとに集まってきた。タタールがルメリで増加し、力を回復すると、バヤズイトのヴェズィールたちはその勢力に不安を覚え、動揺し始めた。大宰相であったアリー・バシヤはその状況をバヤズイトに伝え、タタールが謀叛を起こす前に彼らの力を削ぐよう説得に努めた。バヤズイトも間もなく、アクタイが擁するタタールの勢力の大きさに恐怖を感じるようになり、アリー・バシヤにアクタイの暗殺を命じた。アリー・バシヤはエディルネの砦で宴を催し、そこへアクタイを招いて毒殺した。遺体はエディルネ郊外に埋葬された。アクタイの従者たちは混乱して散り散りとなり、領地を捨てて去った。しかし一部の者はとどまり、その内5万人がシパーヒ(騎兵)として登録された。のち、この5万騎がアンカラの会戦に従軍した。”(fol.145a-147a, 154a[校訂テキスト: pp.249-263, 315])

- (9)カラ・タタールについて。

“ルーム地方を住处とするカラ・タタールという不品行な部族がいた。彼らは11万戸

から成っていた。その周辺に住む人々は、絶えずカラ・タタールの圧迫を受け、その不法をバヤズイトに訴えていた。バヤズイトもしばしば命令を出したが、カラ・タタールは聞き入れなかった。このため、バヤズイトは12,000のイエニチェリにカラ・タタールを襲撃させた。敗れたカラ・タタールは、今後バヤズイトのあらゆる命令に従うこと、遠征の際には一戸から一騎ずつ、計11万騎がバヤズイトに合流することを約束した。” (fol.147a-148a[校訂テキスト: pp.263-271])

本論文第2部の校訂に関しては、アラブ文字による校訂テキストだけでなく、ローマ字による転写も付した。その際、ローマ字からアラブ文字の原文を復元できるようトランスリテレーション方式を採用した。「注釈」の部分では、上記の独自の情報の信頼性について検討を加えつつ、バヤズイト1世時代の諸事件全般について、その具体的内容や起こった年代を明らかにすることに努めた。その結果、こうした独自の情報の中には歴史的事実として受け入れ難いものも見受けられるが、外部史料で確証される情報もまた、数多く存在していることが判明した。特に、王子エルトゥールルやウジ・ベイの行動がかなり詳細に描かれ、またシェイフたちにも言及されていることは本書第4部の特徴のひとつとなっている。『ケマルパシャザーデ・ターリヒ』がこうした貴重な情報を含んでいるにもかかわらず、その後の史書に受け継がれずに忘れ去られていったことを想起する時、この書を利用すべき必要性はおのずと高まるであろう。今後、これら独自の情報をさらに検討し、その信頼性を確認した上で利用していくならば、本書第4部は、バヤズイト1世時代に関して、アシュクパシャザーデ、ネシュリーといった根本史料と同様、常に参照すべき重要史料のひとつとなることは間違いない。